

# 友の会通信

## 館の運営状況

しょうけい館におきましても新型コロナウイルスの感染拡大防止のため、二月二八日より約三か月間にわたって臨時休館をしております。六月二日より運営を再開した、しょうけい館の感染症拡大防止対策をご紹介します。

### 館の対策

職員は毎日検温をするなど健康状態の確認を行います。受付にはアクリルついたてを設置しています。展示室内においては清掃・消毒に取り組みとともに、特に接触の多いと考えられる箇所では開館中も適宜消毒をします。また、窓・ドアを解放することや適切な空調の使用により館内の空気の流れ替えを行っています。その他にも三密の間を避けるため、座席の間引きやラインマーカーの設置に合わせて、入場者数の上限を設けるほか、団体見学やイベント、ガイドツアーを一時中止しています。

### ご来館者の対策

ご来館の方へ、マスクの着用を義務付けており、入館時には手指の消毒と検温を行っています。また、万が一ウイルスの感染が疑われるケースが発生した場合にスムーズな連絡を差し上げるため、連絡先の記入を依頼しています。館内では、他の方と距離を保っていたり、ようお願いをしています。



来館者受付の様子



映像シアターの様子

### 来館者の声

◆語り部講話で実際に両腕をなくされた方のお話を聞いてとても心が痛み戦争のもっと奥深いことを知ることができました。今日のことを家族にも話、戦争でたまたかってくれた人たちのことを一生忘れないようにしたいです。  
(一〇代女性)

◆戦死者、戦傷者が実際に身に付けていた物を見た経験は、テレビや映画よりも生々しく心に残り戦争によって確かにたくさんの方が傷つき、犠牲になったことを実感しました。戦争の痛みを語り部に受け継ぐことが、戦争を二度と起こさないために必要だと思えます。  
(一〇代男性)

◆証言映像は色々考えさせられることがあり、改めて五体満足が、どれほど大切なのかを感じる事ができました。あまり戦傷病者自身の体験談や感想などを聞く機会がないのでとても参考になりました。  
(一〇代女性)

### 資料寄贈のお願い

戦傷病者の皆様に関する資料(写真、回想記、軍装品、摘出弾、義肢、受傷や恩給に関する文書等)、奥様やご家族に関する資料(日記、写真等)、傷痍軍人会、妻の会に関する資料(会旗、名簿等)をお持ちの方からのご連絡を待ちしております。

資料は館で大切に保管し、継承事業に活用させていただきます。

「友の会通信」は毎年二回の発行を予定しております。

秋冷の折、皆様どうぞお身体ご自愛下さい。



発行/しょうけい館  
戦傷病者史料館  
〒102-0074 東京都千代田区九段南 1-5-13  
ツカキスクエア九段下  
電話 03(3234)7821  
FAX 03(3234)7826

## 友の会通信

### 第10号

仲秋の候、皆様におかれましては、益々ご清祥のこととお慶び申し上げます。

また、日頃より、当館の活動及び事業にご支援とご協力を賜り、厚く御礼申し上げます。

戦後七五年を迎えた今年、新型コロナウイルスの影響で、追悼行事や戦争体験を語り継ぐ活動は、全国各地で中止や縮小、延期を余儀なくされています。

当館におきましても、感染拡大防止策として二月二八日から五月末まで臨時休館といたしました。そのため、春の企画展の開催を中止とさせていただきます。その後、六月二日より開館しておりますが、団体見学の受け入れや語り部講話活動などを休止とさせていただきます。令和二年九月一〇日現在、今後も感染拡大等の状況により館の催事、運営など変更を余儀なくされる場合がございます。

当館にお越しになる際には、事前に当館のホームページ等をご確認ください。よろしくお願いいたします。

戦争体験者が増えます。高齢化しているなか、今般のコロナ禍により戦争の体験や戦傷病者とそのご家族の労苦を語り継ぐ活動に制約を受ける状況が続いています。これからは、インターネットの活用など新たな活動の場を模索していかなければならないと思っております。

今後とも皆様のご支援、ご協力を賜りますようお願い申し上げます。

令和二年九月

しょうけい館 館長 奥野 義章

## 夏の企画展 開催報告

### 夏の企画展「車いすと戦傷病者」

会期 令和二年七月一四日(火)～九月一三日(日)

令和二年夏の企画展は、戦傷病の中で重度障害とされた脊髄損傷と箱根療養所での車いす生活について取り上げました。また、車いすそのものにも目を向け、戦中・戦後における車いすの役割や、戦後のパラリンピックスポーツへの進展などについても紹介しました。

皆さんの中には、箱根療養所へ慰問に行かれた方もいらっしゃると思います。先の大戦で重度の障害を負い、日常生活が困難となった傷痍軍人は再起奉公がかなわず、箱根療養所で療養生活を送ることになりました。車いすでの療養生活は、戦中・戦後を通して医療関係者による専門的なケアだけでなく、家族の介護と支援がなければ成り立たないものでした。そうした中で入所者は、家族同士の結束も深めながら、戦後は傷痍軍人会の活動やパラリンピック出場に向けて意欲的に取り組んでいきました。

当館が所蔵する箱根療養所からの寄贈資料、箱根式車いすのほか、競技用車いすの最新モデルも展示しました。二〇二一年開催予定の東京パラリンピックにも思いを馳せて頂けたのではないかと思います。



竹細工を作る入所者



競技用車いす最新モデル

## 八月一五日終戦記念日 しょうけい館での素敵な出会い

終戦記念日の八月一五日には多くの皆様に来館いただきました。そこで思いもよらぬ出会いがありました。

出会いを取りもった方は、伊東朝雄さん。戦傷病者の方で既にお亡くなりになっています。

当館で行っている戦傷病者の証言映像に協力いただき、平成一六年に伊東さんの証言を映像で記録させていただきました。

水兵だった伊東さんは、昭和一九年駆逐艦に乗船中、トラック諸島春島沖で空襲に遭い、両腕を無くしました。大変な苦勞をされましたが、奥様やご子息ご家族の支えが何よりだったと証言映像の中でお話になっています。

八月一五日、伊東さんのご子息ご家族が、「親父に会いたくなつた」と証言映像の視聴に来館されました。

そこにたまたま来館したのが、当館の語り部の保坂さん。戦後生まれの語り部として、当館の証言映像などの資料をもとに戦傷病者のご苦勞を講話として語り継ぐ活動をしています。

保坂さんは講話で伊東さんの人生を紹介しています。しかし、講話を作るときには伊東さんは既に亡くなられており、直接お話を聞くことはできませんでした。それでも所蔵資料などから苦勞して講話原稿を作り、若い世代の方に語り継いでいます。

この日、保坂さんは初めて伊東さんのご家族と会いました。「ぜひ親父の話を多くに人に伝えてください。」息子さんの嬉しい声が響きます。

「はい！これからお父様の思いを伝えていきます。」保坂さんの感激の涙はしばらく止まりませんでした。

終戦記念の日に、平和の尊さを語り継ぐ素敵な出会いに立ち会えました。

## 戦傷病者の証言 奥村豊さん

戦後七五年を迎えた今年八月、節目の年ということもあり、新聞各紙で戦争を語り継ぐための特集が数多く組まれました。その中の一つ、八月一三日発行の読売新聞で、当館友の会会員の奥村豊さんが紹介されました。記事の中で奥村さんは、「多くの死をこの目で見た。自分のことを武勇伝のように話すのはおこがましく、心苦しかった」と、これまでは語る事にとめらるるを感じていました。九〇歳を超えて「自分は生かされた」との思いが強まりました、自分の体験を語る事が使命と考えるようになったと話されています。奥村さんの思いに触れ、戦傷病者のご苦勞を伝えていく当館の使命をますます実感する事となりました。

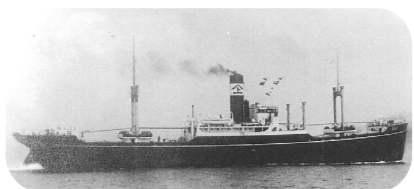


奥村豊さん

### 奥村さんの戦争体験

奥村さんは、一四歳の時に神戸の海員養成所に入所し、三か月の訓練を経た後に輸送船「黄海丸」の機関員となりました。暑いボイラー室での仕事は大変なもので、二升の水を全部飲んでしまう程だったといえます。

黄海丸は、南方への物資輸送を担っていた海軍の徴用船で、昭和一九年初頭、戦況の悪化著しいラバウルに向いました。その帰路、航空隊の支援のため、数百人の兵員を載せてパラオに向けて出港した昭和一九年二月二一日、最初の悲劇が奥村さんを襲います。船が敵航空機に発見され、爆撃を受けたのです。幸いにもその時見張りをしていた奥村さんは無傷で済みました。



黄海丸

所蔵：戦没した船と海員の資料館

## 春の企画展 開催予告

春の企画展「病床からフィールドへ

スポーツに取り組んだ戦傷病者の軌跡」

会期 令和三年三月一六日(火)～五月九日(日) 予定

来年は、今年臨時休館のため中止となったパラリンピックに係した企画展を開催する予定です。

一九六四年に行われた東京パラリンピックは、第一部国際ストーク・マンデビル競技大会と第二部国内大会に分かれて開催されました。第一部では脊髄損傷で車椅子を使用する選手、第二部では車椅子を除いた身体障害者の選手が競い合いました。どちらの大会にも戦傷病者が出場し、多くの競技において記録を残しました。

特に第一部国際ストーク・マンデビル競技大会では、箱根療養所から二名の戦傷病者が出場し、両名とも複数のメダルを獲得する快挙を成し遂げました。

本展では、戦時中に行われたスポーツ大会や一九六四年東京パラリンピックの歴史を紹介するとともに、戦傷病者がスポーツとの関わりの中で自身が抱える傷病をどのように乗り越えようとしたのかを紹介します。

また、本展では、今年新たに発見された一九六四年の東京パラリンピックのカラー記録映画を上映する予定です。



パラリンピックのカラー映像



戦傷病者が獲得した水泳の銀メダル

が、船は沈み、僅かな時間で多くの仲間を失いました。

何とか生き残った約五〇人は、爆風で穴だらけのボートに乗り込み、陸を目指しました。動ける人は船内の水を掻き出したり、船を漕いだりして島にたどり着きました。無人島のジャングルをさまよいらバウルの基地を目指す道中、負傷した人を治療する術はなく、一人、また一人と息絶えていきました。一ヶ月以上かけて島々を伝い、基地まで辿り着いたのは、奥村さんを含め僅か七人でした。

九死に一生を得、束の間の平穏を取り戻した奥村さんは、海軍病院で負傷した仲間の世話係を務めていました。昭和一九年八月二九日、二度目の悲劇が奥村さんを襲います。空襲で飛来した機銃弾が病院の屋根を貫通し、奥村さんの右手を砕いたのです。ぶら下がった右手を持って医務室に走りましたが、軍医には「切った方が早く治る」と言われ、翌日には切断手術を受けました。当時、奥村さんは、まだ一六歳でした。

終戦を迎えて日本に戻った奥村さんは、印刷関係の仕事に就き、後には自ら印刷会社を興しました。利き腕を失ったハンディから苦勞する事も多くありましたが、持ち前の前向きさと真面目さ、そして仕事に誠実な奥村様の協力もあり、遂には地域でも評判の印刷屋になりました。

肘から先がない右手について、奥村さんはこのように話しています。「手がないと思っていない。ただ短いだけや」

その前向きな言葉に込められた意味と、その壮絶な体験を、私達は語り継いでいきたいと思えます。

### 証言映像収録のお願い

証言映像は、戦中・戦後の苦勞を伝えるための貴重な資料となります。引き続き当館では、証言映像の収録を進めて参りますので、年齢、地域にかかわらず、戦傷病者とそのご家族でご協力頂ける方は、ぜひ当館までお知らせ下さい。

友の会通信第一〇号を発行した折には、皆様より多数のお便りをいただきました。誠にありがとうございます。「戦後七五周年を迎えて」ということで様々なご意見をいただきました。折角の機会ですので、皆様より頂いたお便りの中から一部を紹介させていただきます。

ご感想

◆現在施設に入っておりますが、元気で。九七歳になり、足腰もだいぶ弱ってきました。コロナの関係で面会もかなわずさみしい限りです。  
(福島県)

◆先の大戦の戦没者の身変りに伴い運良き生き耐え感謝いたします。余生は生きるが戦力。まず健康が大切です。  
(兵庫県)

◆何時の間にか九五歳になり毎日充実した生活を送っております。主人と別れて二〇年、思いで多く豊かに暮らして感謝しています。淋しい事は友が少なくなっていくことです。精一杯いろいろなことにチャレンジして生活、一人暮らしています。  
(岐阜県)

◆子供たちに父や母から聞いた戦争に関する体験談を何か機会があったときに少しずつ話しています。  
(福岡県)

◆九九歳になり思っても行動が叶わずも、生涯現役を目指して毎日農作業に従事し、健康に心しております。今後も毎年、戦没者追悼式・慰霊祭には参加してまいります。  
(群馬県)

# 友の会通信 第11号

令和三年一月一五日、当館館長の奥野義章は逝去いたしました。享年九九歳。奥野は、平成一七年から平成二五年まで(財)日本傷痍軍人会会長、平成二六年から現在まで当館館長を務めました。葬儀は一月一九日に執り行われました。ここに謹んでお知らせ申し上げます。今年三月、しょうけい館は開館一五周年を迎えることとなります。その日を館長と共に迎えることができなくなったことは、残念でなりません。

昨年は新型コロナウイルス感染症拡大の影響で、当館においても企画展等の中止や臨時休館などがありました。今後も催事や運営の変更を余儀なくされることもあるかもしれません。しかしながら、開館以来私たちが持ち続けてきた、戦傷病者とそのご家族が戦中・戦後に体験したさまざまな労苦を後世代の人々に継承していく使命は、変わることはありません。これからも感染症拡大防止に努めながら、地道で着実な活動を続けてまいります。今年三月からの春の企画展は、昨年中止となった東京パラリンピックに関連した展示を、一年越しで開催する予定です。本号では、昨年事業のうち地方展や語り部などの活動についてご報告申し上げます。

本年もより一層のご支援を賜りますよう、館長に代りお願い申し上げます。なお、新館長が選任されるまで当面の間、館長業務は事務局長が代行して参ります。

令和三年二月

しょうけい館 事務局長 北村 明

来館者の声

◆戦争を体験した人々がお亡くなりになって今この時代にこうして戦争のことを学ぶ施設があることはとてもありがたいことです。自分達の視点では気がつかないことを教えてくれる素晴らしい施設であると感じました。  
(二〇代男性)

◆普段あまり見ることのない「医療」の視点から戦争について学ぶことができ、とても参考になりました。  
(一〇代女性)

◆戦争の苦しみとは戦時中に限らず今現在までずっと続いているものであることを痛感しました。  
(四〇代男性)

◆本日、語り部の皆さんの語りを聞いて。戦傷病者の人びとの過酷な人生体験や思いが伝わってきました。戦争によって沢山の人が大変な目にあってしまったと思います。  
(四〇代女性)

資料寄贈のお願い

戦傷病者の皆様に関する資料(写真、回想記、軍装品、摘出弾、義肢、受傷や恩給に関する文書等)、奥様やご家族に関する資料(日記、写真等)、傷痍軍人会、妻の会に関する資料(会旗、名簿等)をお持ちの方からのご連絡を待ちしております。

資料は館で大切に保管し、継承事業に活用させていただきます。

「友の会通信」は毎年二回の発行を予定しております。向春の候、皆様くれぐれもお身体ご自愛下さい。



発行/しょうけい館  
戦傷病者史料館  
〒102-0074 東京都千代田区九段南1-5-13  
ツカキスクエア九段下  
電話 03(3234)7821  
FAX 03(3234)7826

## 春の企画展予告

「病床からフィールドへ」

くスポーツに取り組んだ戦傷病者の軌跡く

会期 令和三年三月一六日(火)く五月九日(日) 予定

本展では、戦時中に行われたスポーツ大会や一九六四年東京パラリンピックの歴史を紹介し、戦傷病者がスポーツとの関わりの中で自身が抱える傷病をどのように乗り越えようとしたのかを考察します。

ここでは、東京パラリンピックで銀メダルを二個獲得し、選手団の代表を務めた戦傷病者をご紹介します。

青野繁夫さん

昭和一八年に出征先の中国で腰部を受傷し、両脚に傷害を負います。戦後、長期療養を目的として箱根療養所に入所します。昭和三九年東京パラリンピックでは水泳とフェンシング団体で銀メダルを獲得しました。青野さんはパラリンピックに参加したことにより、将来に期待して、自分に与えられた使命を果たすように努力する意思を持つことができました。



青野繁夫さん



水泳銀メダル

# 地方展 開催報告

しょうけい館（戦傷病者史料館）・岩手展

会期 令和二年一〇月二日（金）～一〇月三十一日（日）

岩手県の盛岡市民文化ホールにて、昭和館、平和祈念展示資料館と連携して展示会を開催しました。

今回の展示では、銃弾の痕を残す煙草ケースなど受傷したことを示す資料を、関連情報を伝える映像と合わせて展示し、誰もが戦争の悲惨さを理解できるような工夫をしました。多くの来場者が足を止め、展示資料をじっくりとご覧になっていました。

令和三年度は島根県にて、昭和館、平和祈念展示資料館と合同で展示会を開催する予定です。多くの方々にご来場いただけるよう準備を進めて参ります。

来場者の感想

- ◆ただ展示するだけではなく、どのよう  
に受傷したのかが分かりやすかった。
- ◆傷を負った方々の労苦や当時の様子が  
分かり、大変だったんだなと思った。
- ◆イラストなどもあり面白かった。  
シヨッキングな展示品なども含まれて  
いて戦争の悲惨さをリアルに感じた。



展示会の様子



じっくりと見る親子

## ミニ展示

令和二年九月一日から一二月末まで、ミニ展示「寄贈資料紹介シベリア珪肺」を開催しました。

シベリア珪肺は、戦後、ソ連に抑留され、鉱山労働に従事した人がかかったもので、一般の珪肺症と区別して、「シベリア珪肺」と呼んでいます。寄贈者の山本さんは、削岩手として鉱山労働にあたり、昭和四〇年頃に珪肺を発症しました。今回は、シベリア珪肺の診断と治療、療養生活の難しさなどを経験された経緯とともに紹介しました。

## 証言映像収録

今年度は、箱根療養所へ入所されていた戦傷病者のご子息の証言を収録しました。

日中戦争中の負傷で脊髄損傷となり、箱根療養所へ収容された方です。脊髄損傷のため、収容者の世話を看護婦だけでは賄いきれないため、妻や子供も入所していました。証言者は、脊髄損傷だけでなく両脚切断された父のベッドに入れなかつた子供時代など、戦中・戦後を通して「大家族のよう」であったと当時の様子を振り返ります。



映像収録の様子



展示の様子



山本さんの酸素ポンプ

## 語り部講話活動

### 第二期生 語り部デビュー

令和二年九月に、第二期生の最終審査会が行われ、六名が審査に合格しました。修了式は、残念ながら台風の影響で中止となってしまいましたが、それぞれがこれまでの研修で培ってきた思いを胸に修了証書を手に入れました。そして一〇月からは語り部としての活動をスタートさせました。

### 定期講話会の開催

令和二年一〇月より「次世代の語り部 定期講話会」を始めました。これまで語り部講話活動は、団体予約を中心に行ってききましたが、個人の来館者へ講話を聞く機会を提供すること、語り部の講話技術向上を目指して活動の場を設けることを目的として、毎月土曜日に二回開催するようになりました。

コロナ禍で来館者は少なくなっていますが、講話会に参加して下さる方は最後まで真剣に聞いて下さっていました。これからも感染症対策を行いながら講話会を続けていきたいと思っています。



語り部の講話



定期講話会の様子

## 証言映像収録のお願い

証言映像は、戦中・戦後の労苦を伝えるための貴重な資料となります。引き続き当館では、証言映像の収録を進めて参りますので、年齢、地域にかかわらず、戦傷病者とそのご家族でご協力頂ける方は、ぜひ当館までお知らせ下さい。

## 中国帰国者支援・交流センターとの交流

「次世代の語り部」事業は、昭和館・しょうけい館・中国帰国者支援・交流センターの三館で行っています。第二回と第四回定期講話会には、中国センターの語り部の方々が参加して下さい、講話会の後に、しょうけい館の語り部と意見交流会を行いました。

同じ「次世代の語り部」として、先の大戦の経験者の労苦体験を講話の中でどのように語り継いでいくか、どういう思いを持って講話活動に挑んでいるのかなど、様々な意見を交換し合いました。これからも交流を深めながら、活動を続けていきたいと思っています。

## 派遣講話

令和二年九月と一〇月に、小田原市のデイサービス施設から派遣講話の依頼がありました。戦中生まれの方、戦後生まれの方それぞれから、当時の思い出も話して頂くことができました。一二月二五日には、世田谷区主催のピースセミナーで講話をおこないました。小学校四年生の親子が多く参加して下さいました。



交流会の様子